

性表現への意味付与をめぐる「現実－虚構」の枠組分析

矢島毅昌（立教大学大学院）

われわれの身のまわりには、各種映像メディアに媒介された視覚的な表現があふれている。その時に気づくのは、人物を表現の対象とするものは、多かれ少なかれ性表現であるということである。性的な衣類や身体部位に視線が集まるように描かれた表現は数多く、また人物のしぐさや振る舞いから性的なメッセージを読み取ったりもする。われわれの生活は、性表現——ここでの性表現とは、もちろんのことであるが狭義のポルノグラフィーとは異なるものである——に囲まれていると言っても言い過ぎではないだろう。これらはどのような印象を人々に与えてきたか。

様々な性表現の中でも、性行為を表現したものは特に複雑な印象を人々に与え、意味付与やリアリティの判定が難しいものの一つであるだろう。ゴールデンタイムのテレビドラマにおける性行為は、まったくの演技であるという前提で放送ならびに視聴されているが、アダルトビデオにおける性行為の場合は、はたして演技なのか本物なのかについての議論は極めて重大なものとなる。実写による表現の場合には、たとえ作品の内容がフィクションであり、そこで出演者が演じた行為がフィクションであるとしても、演技そのものの自体はフィクションではないのであり、そのことは「何が本物であるか」を認識する際に困難をもたらす多層構造が存在することを示している。

また映像メディアに媒介された性表現は、不可避免的に映像メディアの持つ問題点とも関係してくるだろう。特に近年問題となっているのは、映像メディアの虚構性に関わるものである。宮崎勤の事件の際に一般へ大きく広がった「オタク」というカテゴリーは、しばしば「現実と虚構との区別がつかない人たち」として扱われる。さらに酒鬼薔薇聖斗の事件も様々な映像メディアからの影響を思わせるものであったことにより、映像メディアの持つ虚構性の問題は、もはや決まり文句となってしまった感がある。

映像メディアへの批判においては、その内容に十分触れることなく悪者扱いをしてしまう風潮があるのではないかとも思われる。その背景には、内容に踏み込む以前に映像メディアの印象を左右する要素が何か存在しているのではないかと感じていた。そこで本報告では、映像メディアの表現に対する意味付与が、「オタク」への偏見や有害メディアへの批判などにおいて見られるような「現実－虚構」の構図によって展開されていくことに着目する。それを踏まえて、性表現を、映像メディアの特性の側面と、対象として描かれている性の側面との二面から分析することを試みたい。性表現を「現実－虚構」の問題と交差させたとき、

性表現で描かれる対象としての性は、何がどのように扱われているかを考察する。また「現実」や「虚構」の語は、多くの言葉がそうであるように、辞書に掲載されているような文字通りの意味にとどまらず、歴史的、社会的に様々な印象を付与されて使われている。特に「虚構」は、先に述べたような事件の影響もあってか、胡散臭さや気味悪さのようなネガティブな印象がまとわりつくことも多いだろう。これらに基づいた意味付与を分析していきたいと考えている。

従来のメディア論において、われわれの日常的生活の世界とメディアがつくる世界との関係については様々に述べられている。映像メディアがつくる虚構の世界は、リップマンの「疑似環境」やブーアスティンの「疑似イベント」のように、日常的生活の世界とは異なるもので、現実と対立するものとして捉える考え方は今も影響力を持つだろう。しかし、われわれが直接に生身の身体でアクセス可能な生身の世界は極めて限定的であり、テレビや新聞によって入手した情報をもって、世界の動きを知ったことになっている。映像メディアが報じる内容は現実の単純な反映ではないが、報じた内容は現実として位置づけられるものである。（とはいえ、突進してくる列車の映像を見て、悲鳴をあげながら逃げってしまうような形で映像メディアを現実と思い込んでしまうこととは異なるものであるが。）もはや「現実－虚構」の二分法には、かつて信じられていたような素朴さはない。ボードリヤールは、映像テクノロジーの発達でイメージが仮想的な現実となり、両者が消滅したという言い方で現実と虚構との不可分性を表現しており、それは「ヴァーチャルなものとともに、われわれは現実とその準拠枠が清算される時代に入った」（Baudrillard 訳書 1998, 162頁）という言葉によくあらわれている。

一方、フィクションとしての性格を持つ映像メディアは扱いが別物となっている。特にマンガ・アニメ・テレビゲーム・特撮などは、宮崎勤および以降に現れた数々の猟奇的な犯罪者と結びつけられたことにより、ネガティブな印象がつきまといがちであると言えるだろう。特定の映像メディアに対しては、「現実－虚構」の二分法に基づき、一方を批判するという構図が今でも十分に力を持っている。

性行為を扱った表現については、何が「現実」で何が「虚構」であるかの主張は以下のようなものが見られる。

- ・ポルノグラフィーは表現ではなく実際の行為だ。
- ・性的弱者が欲求を満たすヴァーチャルな世界が必要だ。

・レイプAVは演技ではなく本物のレイプだ。

こうした主張を踏まえると、リアリティ認識は様々なレベルにおいて「現実－虚構」の対比を基になされ、その状況に応じて意味付与を左右するものとなると考えることができる。われわれは「現実－虚構」の二分法によって、何が「現実」であり、何が「虚構」であるかを認識し、そのことによって対象との関わり方に変化が生じてくる。では、この二分法はどのような形で適用されているのだろうか。

われわれの日常生活世界と映像メディアに描かれた世界とは二分されたものとして通常は捉えられる。この〈現実世界－虚構世界〉の構図は、もっとも普通に想定されるものである。だが、われわれの日常生活世界は、どのように成立しているのだろうか。自らの知っている世界のすべてを生身の世界として接触しているという人は、ある程度映像メディアが普及しているところではほとんど存在しないだろう。報道系の映像メディア（写真つきの新聞やテレビのニュース等）が日常生活世界、すなわち現実世界を成立させている。こうして〈日常生活世界、報道系の映像メディア－フィクションな映像メディア〉という構図になる。報道系の映像メディアとフィクションな映像メディアとを二分することには、さまざまな批判ができるだろう。ただ、猟奇的な犯罪が起こると「現実と虚構との区別がつかない」という決まり文句によってフィクションな映像メディアを批判するのが報道系の映像メディアであり、こうして報道系の映像メディアは自らの現実性を確保し、虚構の持つネガティブな印象を遠ざけることになるとは言えるだろう。

またフィクションな映像メディアにおいては、映像メディアに描かれた対象の特性からも、さらなる「現実－虚構」の二分法が成立する。描かれた対象が通常の実写である場合と、アニメ・マンガ・テレビゲーム等である場合とに分けると、〈現実対象－虚構対象〉という構図になる。虚構対象は、俗に言う「オタク」な映像メディアが中心であり、これらはフィクションであることが自明視されている。まとめると〈現実対象のフィクション－虚構対象のフィクション〉という構図で表すことができる。

フィクションな映像メディアで描かれる出来事や行為は、ゴッフマンの枠組概念では本物ではなく変形されたものであり、本物とは異なる意味を付与される。そこから本物の行為と演技という二分法が成立する。〈現実行為－虚構行為〉という構図である。フィクション内の行為は、演技であることが前提となっている。だが行為の演技自体は本物である。このことは演技をめぐる、本当になされていることは何か、何が本物であるのかについての問題となる。

以上を踏まえて、本報告の分析対象である性行為の表現について考えてみたい。フィクションな映像メディアで描かれる性行為の表現においては、あくまでも性行為は演技であって、本物の性行為ではないこと

が前提とされている。だが、アダルトビデオにおけるレイプなど過激な性行為の表現では、もしかしたら本物の性行為かもしれないと思われることがあり、特に反ポルノグラフィーの立場からは激しい批判にさらされることになる。ここで注目されているのが、性行為を描いた映像メディアという枠組の特徴ではなく、変形前の行為そのものであることが一因である（Goffman 1974, p.55）。しかし、テレビで2時間ドラマや時代劇を見れば、過激な性行為の場面がゴールデンタイムや昼頃に堂々と放送されていることがわかる。たとえば時代劇もレイプシーンの宝庫であり、時にはその場でレイプされた女性が舌を噛み切って自害することもあるのだが、あまり激しい批判を浴びることはない。このような差異は、どのように生じてくるのだろうか。この表現はフィクションであり、演技であるという枠組を受け手に維持させようとする装置と、そうした枠組を維持することが不可能になるほどに感情や本能が表出したと思われる表現との間で、せめぎ合いがなされていると考えられる。

このような「現実－虚構」の二分法が適用されることにより、性表現をめぐる何がクローズアップされるか方向づけられることになり、そこから表現への意味付与が展開されていくのである。

〔参考文献〕

- 浅野千恵 1999, 「ネオ・リベラリズムと性暴力」『現代思想 特集ジェンダー・スタディーズ』第27巻第1号, 青土社, 216-230頁。
- Barthes, R. 1957, 篠沢秀夫訳『神話作用』現代思潮社, 1967。
- Baudrillard, J. 1995, 塚原史訳『完全犯罪』紀伊国屋書店, 1998。
- Boorstin, D. 1962, 星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代』東京創元社, 1964。
- Goffman, E. 1974, *Frame analysis*, Harper&Row.
- 萩原弘子 1999, 「表現、流通、セクシュアリティ 『アラキー』写真と意味形成の磁場」『現代思想 特集ジェンダー・スタディーズ』第27巻第1号, 青土社, 142-157頁。
- 長谷正人 2000, 『映像という神秘と快楽 —— 〈世界〉と触れ合うためのレッスン』以文社。
- リー・トンプソン 1991, 「プロレスの枠組分析」岡村正史編著『日本プロレス学宣言』現代書館, 27-60頁。
- Lippmann, W. 1922, 掛川トミ子訳『世論(上)』岩波文庫, 1987。
- Mackinnon, C. 1993, 柿木和代訳『ポルノグラフィ 「平等権」と「表現の自由」の間で』明石書房, 1995。
- 宮台真司・藤井誠二 1998, 『学校的日常を生き抜け —— 死なず殺さず殺されず ——』教育史料出版会。